

「現実性」について

清水 茂雄

Über die Wirklichkeit

Shigeo SHIMIZU

Zusammenfassung : Diese Abhandlung handelt über die Beziehung zwischen der Wirklichkeit in der Logik Hegels und der mittelbare-mitteilungstheoretischen Logik. Um die Beziehung zwischen beiden klarzumachen, soll die Möglichkeit beachtet werden, weil nach der mittelbare-mitteilungstheoretischen Logik die Möglichkeit den Grund ihrer Möglichkeit in der Unmöglichkeit hat und die Wirklichkeit aus der Möglichkeit, die aus der Unmöglichkeit entsteht, entspringt. Aber Hegel konnte nicht die Möglichkeit der Möglichkeit bemerken, welches meint, daß die Wirklichkeit in der Logik Hegels die Möglichkeit und Notwendigkeit beherrscht, weil die Möglichkeit ihre eigentlichen Macht innerhalb der Logik Hegels verliert hat.

Indem die Wirklichkeit in der Logik Hegels auf diese Weise von dem Standpunkt der mittelbare-mitteilungstheoretischen Logik aus zurückgeblickt wird, muß das spekulative Philosophieren als die Verirrung des anfänglichen Wortes ausgelegt werden.

Key Words : Wirklichkeit(現実性), die Logik Hegels(ヘーゲルの論理学), die mittelbare-mitteilungstheoretische Logik(間接伝達論的論理学)

序 論

この論文は、本質的には既刊の拙著、『間接伝達論的論理学』の第二部としての「注釈部」に属するものである。「注釈部」はこれまで原著のP. 32まで進んでいるが、そこでようやくヘーゲルの「論理学」に関する注釈ができるような段階まで達したのである。

「間接伝達論的論理学」は、言葉の発祥地から歴史上に現れた根幹的な哲学を歴史的論理学として見直し、それらを言葉の発祥地へ言葉がいわば帰還する諸段階と捉えるところの論理学である。この諸段階は、大きく分けると3段階から成る。最初は、言葉が初めに言われる場面であり、次にその初めの言葉が「用意の秘術語」を発言することで成立する場面、そして、第三番目は、「用意の秘術語」

内部で自己忘却が起こり、言葉が迷路に迷う場面である（以下、「言葉が」と言われているのはすべてこのような意味で言われる。「言葉を人間が語る」のではない。「言葉が」言葉として言うということは尋常な事態ではないことを読者は注意する必要がある）。筆者は、この三つの段階をそれぞれ「日曜日」、「土曜日」、「金曜日」とも表わしたのである。通常はこの順番は逆であるが、秩序的にはこの順番になっているのである。歴史的な哲学としては、「金曜日」の場面とは一般に「形而上学」の全体であるが、根本的にはヘーゲルの『論理学』に相当する（ヘーゲルの『論理学』という表記はヘーゲルの著書を、ヘーゲルの「論理学」またはヘーゲル「論理学」という表記は間接伝達論的論理学からその可能

性の根拠を明らかにされた歴史的論理学としてのヘーゲルの論理学を表す)。「土曜日」とはハイデガーの後期の哲学であり、「日曜日」が「間接伝達論的論理学」である。「土曜日」と「金曜日」との間には大きな断絶があり、この断絶の川の兩岸に二つの渡し場が認められる。「金曜日」側の渡し場が西田哲学であり、「土曜日」側の渡し場というより、この川を「土曜日」側へとこぎ進んでいる哲学がニーチェの哲学である。筆者はこれまでこれらの連関を注釈という形態で詳しく説明したのである。しかし、この解明はこれまで、「日曜日」の方から進んできたため、ここに到ってようやくヘーゲルの「論理学」の解明ができる段階まで辿りついたのである。ヘーゲル「論理学」は、言葉が「用意の秘術語」の場面の中で自己忘却を起こし、「用意」の意味を見失って迷い道に迷っていることを言い表している場面なのである。この場面は法華經の喩えを借用して「貧里に迷う」場面と表現されたのである。簡単に言えば、言葉が貧里に迷っている事態を正確に語っていることがヘーゲル「論理学」の内容なのである。しかし、言葉が貧里に迷っているということは簡単なことではなく、むしろ、貧里に迷っているが故に言葉はこの事態を正しく言えなくなっているという極めて複雑なことがらなのである。

貧里に言葉が迷っている故に言葉はこの事態を正しく言うことができず、むしろ、言葉は聞きまちがえられて語っているのである。つまり、貧里に迷っている言葉は、誤って語られるようになっていく。故に、ヘーゲルの「論理学」はもっとも精妙にこの「誤って聞き届けられて語られていること」を遂行するのでなければならぬのである。このような語りが思弁的思惟 (das spekulative Denken) である。そこで、思弁的思惟は、言葉が貧里に迷っている様をこの上なく正確に描写しているのである。もっと言うなら、思弁

的思惟は、「聞く」ことによって語るなのである。語られるものは、誤って聞き取られているのであるが、誤って聞き届けられるということこそ、言葉が貧里に迷っているということを比類なき正確さで語ることなのである。言葉がここで迷っている、故に誤って聞き届けられるのである。誤って聞かれるとは、言葉が迷っていることが言葉の方から言われなくなってしまう、代わって聞く側がいわば影を聞くようになるということである。「影を聞く」というのは異常な表現であるが、事態の核心を言い表している。「思弁的」のドイツ語原語は, *spekulativ* であり、この語の中には「高所から見張る」という意味が潜んでいる。ヘーゲル「論理学」の思弁的思惟において「見張られること」は「聞かれている影」としてのあるロゴスの流動である。影は普通、見られるものであるが、ここでの「影」は誤って聞き取られた「貧里に迷う言葉」である。そして、この「影」に聞くことが、述語の奥に向かって述語付ける主語に迷っている言葉の言い方なのである。こうして、思弁的思惟には超越する述語がこの影の原物として予想されることになるが、これこそ西田哲学の「(絶対無の) 場所」に他ならない。

貧里に迷っている言葉は、「貧里に迷っている」とそのままそのことを言うのではなく、というより、そのように言うことが出来なくなっていて、誤って聞き取られることでしかこの事態を語ることができない。言葉の方からすれば、貧里に迷っているがゆえに、そのようにして語る外ないのであるが、自身の今在る状態が正しく言われているのではなく、ただ、「聞かれている」かぎりでは語るのであるから、自身の今あることがそれとは別のこととして、影として言い表されるのである。このようにして、「影に聞く」という仕方で語られることが、言葉が貧里に迷っていることの言葉の側の言い方 (Weise) となるのである。このようにして、言葉が貧里に

迷っていることを言葉の側から言う言い方には、「影を聞く」ということにおける「聞く」が属していることになる。この「聞く」がヘーゲル「論理学」の思弁的思惟であり、そこで聞かれて語りだされる事柄が弁証法となるのである。

ところで、「影」は、言葉が貧里に迷っているということを表現しているとともに「聞く」側にとっての「見られたこと」、思惟に直接に与えられたもの、真相 (Wahrheit) である。上述したように、ここでの「聞く」は、貧里に迷っている言葉の言い方に属していて、その本質構成分でなければならないのであるから、ある種の必然性を持ち、事柄、つまり、思惟対象の客観性に本質的に関係するものであるとともに、「誤って聞く」となっているのであるから主体的なものでなければならない。思惟の主体性 (すなわち、過ちを犯すという能力) と思惟の客観帰属性 (真理を目指す) とは同一の根源を有するのである。実際、ヘーゲル「論理学」の思弁的思惟はそのような根源的同一性の中で働くのである。故に、「見る (見張る)」ということは、このような根源的同一性を指しているのである。思惟は主観的ではなく、主体的に自ら働くのであるが、この主体性はかの根源に由来するのである。同時に、この思惟の働きは、貧里に迷う言葉の言い方そのものに属しているのであり、その表現に寄与しなければならず、影を見てこれを真相として語らねばならないのである。このような事態を最も核心的に現出させている「論理学」がヘーゲル「論理学」に他ならない。

言葉はこの迷い路から逃れ出て行かねばならず、そうならば、誤って聞くという可能性は無くなるのであり、ここに、言葉は、言葉として言うことが可能になるのである。言葉が影という仕方と言うしかなかった時、真理が「見られていた」のであるが、そこでは絶対に姿を見せることが出来なかったものがあ

ることになる。それがハイデガーが言うところのSeyn (妙有) である。それは、我々の立場からすれば、「用意の秘術語」の内部が言われるようになったことである。ハイデガーはこの場面の論理学を適切にもSigetik (密理学) と言うのである。この言葉の語源であるギリシャ語のσιγητινとは、「秘密にしておくこと」である。そこが「用意の秘術語」の内部であるからこそ、秘密ということが可能になるのである。そこは間接伝達論的論理学の近く場所として (すなわち、「土曜日」として) 秘密に言われることになっていなければならないのである。ハイデガーはこの場面をまた、Es gibt (ドイツ語の普通の意味では、「～がある」であるが、ハイデガーは「それが与える」と読む) としても言い表しているものであり、我々もこの表現を間接伝達論的論理学から妥当なものとし、es gibtと表したのである。es (それ) とは言葉が初めに言われた時のその言葉の人称を表している。「用意の秘術語」がそこから発言されることでこのesは隠れ、ここにes gibtが言われるようになるのである。このes gibtが自己忘却をすることで、上述したように、言葉は貧里に迷い出て行くのである。es gibt内部で生ずるこの自己忘却を (es gibt) と表記する。es gibtに付けられた括弧は、Seynが聞き取られることができなくなったということを表しているのである。(es gibt) は、「影が聞かれる」ということがどのように起きているかを「用意の秘術語」の方から表現しているのであり、したがって、形而上学の全体が何であるかを教えている。

さて、(es gibt) は、言葉が迷い出ていったということ、更に、そのことによって引き起こされた言葉の境遇、貧里に迷うということ表現している。そこでは「影を聞く」ということが起こっているのであった。そして、これをもっとも忠実に遂行している哲学がヘーゲル「論理学」である。その論理学はか

の「影」に向かって聞き澄ませているのである。このことは、迷い路にある言葉にとっては、聞いてもらえる喜びであることになる。そこには深い意味で「意志」が潜んでいることになるが、この「意志」の正体は「言おう (sagen wollen)」ということであることになる。これは、やがてニーチェによって「力への意志 (der Wille zur Macht)」として暴露されることになるのである。これまで真理として見られていたものの奥にその全体を否定するような意志が認められることになり、それは真理を（聞き）誤りに基づくものだと語ることができるようなものでなければならない。こうしてニーチェは形而上学とそれに基づく道德価値の全体に対して巨大な疑問符を付ける使命をもった哲学者となるのである。

我々の注釈はここまでやってきたのであるから、次に為すべきは、貧里に迷っている言葉の境遇を忠実に語るヘーゲル「論理学」への注視ということになるのである。そこではあの (es gibt) はどのような姿となって語られるのであろうか。「影を聞く」ことによって聞かれた内容はどのような展開を見せるのであろうか。以下の論究は、このような問いに答えるための序説と見なされるべきである。

1. 「(es) の規定」と現実性

「影を聞く」ということを忠実に遂行しているヘーゲル「論理学」にとって、「影」はこの「聞く」という主体的行為にとって最初から与えられたもの（ヘーゲル「論理学」で直接性と名付けられていること）である。そして、「影」は言葉が貧里に迷っているが故に言葉が言うそこでのどうすることもできない言い方であり、誤って聞くということを出現させて聞き取られるというやり方に属しているのである。誤って聞かれるその内容は「影」であり、虚像であるが、こういう仕方

で言葉は貧里に迷っている境遇の中に「言う」のである。「聞く」方は主体的となること（言葉の方が主体でなくなるという意味、また、誤りを犯すことができるようになるという二つの意味をもつ）になり、このようになることが影を「見る」ということである。つまり、思弁的思惟が思惟するのである。言葉が貧里に迷うというのは、言葉としては言われなくなることであり、主語-述語関係の中に言葉が迷い込むことを意味する（言葉そのものではない何かが主語になり、それは実は言葉が言っていることだと述語付けるのである）。思弁的思惟は、「影」を聞き澄ませる方向を取ることでこの関係の述語の側に超越するもの（「影」という仕方から脱した言葉）を志向する（現象学の根本概念）のである。そのようにして聞き澄まされて聞き取られた内容は、迷っている言葉の「苦境」ということになる。この「苦境」を言葉は、「(自分は今) 苦境にある」と直接語りだすことはできないが、ヘーゲル「論理学」の遂行過程の中から、「苦境の声」が響いてこなければならないのである。この声 (Stimme) は、初めの言葉の人称であるesが貧里に迷ってこまっている苦境の声であり、これを「(es) の Be-stimmen」と名付け、日本語で「(es) の規定」と表す。(es gibt) の中で誤って聞くことは、かの「影」に耳を澄ませることによって、そこに言葉の苦境の声を聞き届けることができるようになるのである。この声は、「(es) の規定」であり、貧里に迷っている言葉が「影を聞く」という仕方を取ることで自身の境遇を言うことなのである。それ (es) は、そういう仕方 (Weise, Modus) で迷い道に在って言うのであり、そこには、本来的にModus (様態) が属していなければならない。それはそれ自身を言うのではなく、思惟作用も含めた仕方で、「仕方で」言うのである。「影を聞く」ということそのことはその根源において、「仕方で」言うことである。

これがModalität (様相) のカテゴリーの由来となるのである。ヘーゲル「論理学」でこの「(es) の規定」が遂行されるようになる段階が「現実性 (Wirklichkeit)」に他ならない。そこにおいて「言葉のようなもの (ロゴス的なもの、後の「概念 (Begriff)」)」の影がかかるのである。

さて、貧里に迷っている言葉は、まさにそこにある故に、必然的に、「仕方」を取ってその苦境を吐露するということが明瞭になった。このような「仕方」で言葉の苦境の声が聞き取られることになり、その内容は、一種の「影」であり、本当に言っている方は、いわばどこまでも欠在していることになる。しかし、このような欠在は、単に「その場に居ない」ということではなく、むしろ、「仕方」を取るという形である言葉の本来の帰り道、すなわち、「用意の秘術語」内部に向かおうとすることなのである。つまり、「迷う」というのは、単純に迷ってしまうことではなく、むしろ、本来の道に戻ろうと迷うことなのである。ここでは、あのヘラクレイトスの有名な箴言、「上り道と下り道はひとつの同じ道である」ということが成立している。「迷う」のも本来の道を探すから迷うのである。故に、「影を聞く」ということ、そのような「仕方」で語る外ない貧里に迷っている言葉は、このような仕方で言葉の故郷 (言葉が初めに言われている処) へと戻ろうとしているのである。そこで、「(es) の規定」の奥には、この言葉の故郷へ戻ろうという思いが響いていることになる。それは根源的なロゴス的なものの響きである。このものはやがて、ハイデガーによってSeynの呼び声と聞き取られたのである。そこで言葉はようやく「言葉への途上」に立つことができるようになる。

このようにして、「(es) の規定」の中には、あるロゴス的なものの指導が潜んでいることが明らかとなる。しかし、このロゴス的なものは、「仕方」の中で響いているのであるから、

「見る」ということ、つまり、思弁的思惟が思惟することによって以外には捉えられないのである。ここに最大の問題と断絶があると言える。事実上、この断絶が形而上学の国境の関所を形成しているのである。このロゴス的なものが一種の存在者として捉えられる必然性があり、それは、これまで「実体 (Substanz, ウーシア)」として捉えられてきたのである。ハイデガーは、これを的確に「存在者の存在」と指摘したのである。しかし、「影」の中から隠れた仕方と言おうとしているものが何か「有る」というように捉えることこそ、「影を聞く」ということなのである。思惟そのものが「仕方」の構成成分になっていることが「影を聞く」の中では絶対に認識されないようになっているのである。もっとも、スピノザの体系においては、思惟は実体の属性になっているからこの限界を免れているように見える。しかし、この体系もまた、「影を聞く」が「仕方」であることを見抜いてそこを源泉としているものではないのである。「自己原因」は最初に来なければならないのである。彼も「影」を「見て」いるのである。

ところが、ヘーゲルは、「現実性」の基盤に「仕方」ということが有ることを認識していた。様相のカテゴリーのもっとも奥深くに「仕方」、つまり、Modusが潜んでいる、そして、そこで言葉の苦境 (Not) の声が聞こえて来るのであるから、耳を澄ませて「影を聞く」ヘーゲル「論理学」の「現実性」の弁証法は、「仕方」を聞き分けつつ、Notの方向に (wenden)、かくして、やがてそこに必然性 (Not-wendig-keit) を聞き届けることになるのである。

ところで、ヘーゲル「論理学」がここまで到達したとき、何故、そこは「必然性」ではなく、むしろ「現実性」なのであろうか。なるほど、彼は、「現実性」の弁証法の展開とともにやがて「必然性」が現れることを示し

ている。しかし、ここになぜ、「現実性」ということが現れるのであろうか。Modalitätのカテゴリーが現実性、可能性、必然性の三つから成るという伝統的、形式的な前提に従ったためなのであろうか。

ヘーゲル「論理学」において、「現実性」が登場するのは、「本質的關係 (das wesentliche Verhältnis)」において、その最後の段階として「内的なもの (das Innere)」と「外的なもの (das Äußere)」との両者の同一性が措定されることによってである。しかし、そこからどうして「現実性」となるのかが必ずしも明澄であるのではない。

「(es) の規定」はその内実を深く考察するなら、(es) の規定とその前段階としての (es) の規定に区別される。この下線を施すことで強調された区別は、「(es) の規定」そのものから由来する。「(es) の規定」とは、es gibt内部で起こる自己忘却の結果、言葉が貧里に迷い出て行き、言葉としては、「影を聞く」という仕方と言うようになっているという場面において、言葉がその苦境の声を「聞く」側に響かせることである。このようになって「聞く」側は、いわば (es) の方のことからの構成成分であることを想起するようになるわけである。それまでは、「聞く」側は主体であったのに、苦境の声が聞かれるようになると、むしろ、従になり、かの「仕方」の一部となるのである。つまり、「(es) の規定」は、このようになる限り、(es) の規定となるのである。しかるに、そうなる前の段階においては、「(es) の規定」は、まだ (es) の規定ではなく、その外面性になっているのである。このことは、「聞く」側がまだ主体性に固執しているということでもある。このような段階の「(es) の規定」が (es) の規定である。そこには必然的に内的なものとの外的なものとの区別が立てられ、両者の関係が思惟されるようになる。そして、この両者が止揚されることで本来の「(es) の規定」、

つまり、(es) の規定が登場し、これが「現実性」と名付けられるのである ((es) の規定そのものは、最終的に原因と結果との同一性を措定することになり、そこから、いわば (es) そのものが措定される。これが概念である)。我々の思惟をもそこに含むような仕方では自己を規定するものは、先に述べたように、スピノザの哲学の基礎になるものであり、「絶対者」と言われるべきものと考えられるのである。しかし、それが「現実性」と呼ばれるのは何故かが問われるのである。

最初に、この「現実性」の弁証法が、「影を聞く」ということの遂行において、かの「貧里に迷う」言葉の苦境の声が聞き分けられるようになることであるということを更に詳しく考察する必要がある。この「影を聞く」ということは、迷い道にある言葉にとっては、誤って聞き取られることであり、そのような「仕方」で言葉は、迷っているということを経験として語るものである。言葉が自身の故郷への帰り道に正しく赴く場合には、このような「仕方」は無くなってしまふのであり、言葉は「用意の秘術語」の内部にあるようになる。そこは、現実性ということではなく、むしろ、言葉が好ましいことを言うようになっていて、そのような意味でmöglich (可能的) である。それとともに、そこは、言葉がどうしても言わなければならないということとして、必然性の原 (言) 場 (命名が行われている言葉のできごとの場面をこのように表記する) になっている。ここで、言われる「可能性」と「必然性」は、いわゆる様相のカテゴリーではなく、言葉が言おうとしているその原 (言) 場で言われているようなことである。ここには実に「現実性」ということは見られなくなっているのである (Wirklichkeitの概念を支えているwerken, つまり、働くといったことは有り得なくなるのである)。では、「現実性」はどこのことを指していたのだろうか。それは、言葉がそこから脱出してきたあの「貧

里」のできごとを指すのである。言葉が言葉としては言われなくなり、誤って聞き取られていたあの迷い道、そこは、言葉にとっての好ましからざるところとして、「現実性(=嫌なところ)」と名付けられるのである、ハタラクといったことがそこに起きているのである。現実の世界は、我々が過ちを犯す可能性をもちながら、すなわち、主体的に、相互に働き合う世界なのである。故に、「現実性」と名付けているのは、「現実性」のその現場の奥所においてであることが分かる。言葉が迷っているところを「現実性」と命名するものは、自分の今居るところが「現実性」ではないが故にそうするのである。だからして、「現実性」を「現実性」と見なすことに関しては、必然的に、「現実性」の中にその理由を見出すことができないのでなければならない。ヘーゲル「論理学」は「(es)の規定」をしているのであるから、この理論に沿って、「現実性」をなぜ「現実性」と名付けるかが問われないままに、思弁が遂行されるのである。つまり、ヘーゲルは実に正しく「現実性」を思惟しているのである。ヘーゲルからすれば、思弁が到達した「現実性」の領域についてそこを「現実性」と名付けてよいということが奥から指定されているのであり、理由付けができないままにそこを「現実性」と名付けるの外ないのである。いいかえれば、ヘーゲルが「現実性」と名付けているその思弁の領域がまさに「現実性」そのもののなのである。

「現実性」は、言葉が「貧里」に迷っているところを指すのであるが、その理由は、上述したように、言葉が貧里から脱出してきた所は、現実ではないからであった。しかし、このような理由は通常の悟性には全く納得できないものに違いない。しかし、この理由付けは思弁やなんであれ、理性が首肯できるようなものでないことは理解されよう。なぜなら、思弁ないしは理性、思惟は、言葉が迷っていることを「仕方」で語るときのその「仕

方」の構成成分であるのだから、言葉が貧里から脱出してきて言うことを全く理解できないことになっているからである。それゆえ、もしも、思弁が必然性と可能性を思惟する場合には、言葉が貧里から脱出できたところと言われるようになるかの「必然性」と「可能性」が捉えられるのではなく、「現実性」のいわば支配圏域の中で捉えられる限りの「可能性」と「必然性」が思惟されるのである。実際、ヘーゲルの『論理学』は、最初に必然性から始まるのではなく、「形式的現実性」からその弁証法が開始されるのである。上述したように、必然性は、「影を聞く」においてやがて聞き届けられる「苦境の声」であり、そのものがすでに言葉そのものの迷っているということの発言ではなく、いわばその「影」であり、「声」でしかない。つまり、思弁の領域において把握される「必然性」は「必然」そのものが語っているのではない。しかし、それは「苦境の声」として貧里に迷っている言葉がそこから自己の本来の道に戻りたがっていることを表しているものであり、誤って聞くということの中からようやく出現した言葉の方からのメッセージなのである。

同様に、「可能性」もまた、可能性自身としては、「現実性」の領域にはその姿を現して現さないのだからなければならない。「可能性」は「不-可能性」としての初めの言葉から最初に発言された「用意の秘術語」において命名された言であり、「不-可能性」との関係においてのみその意味が明かされるのである。故に、「可能性」が言われているところが「必然性」が命名されているところでもある。ただし、「必然性」は、言葉が初めの言葉に戻ろうとしていることであるが、「可能性」は、逆に初めの言葉から由来することを意味しているのである。両者が言われている「用意の秘術語」内部には現実といったことが言われる理由が全く無くなっているのである。しかし、「必然性」が捉えられるかぎり、

同時にそこに必ず「可能性」もまた伴うようにできているのである。かくして、「影を聞く」中に聞き届けられる「苦境の声」にはそこに同時に「可能性」が伴うのであり、後者は「現実性」に否定的に現れるのである。これら三者は、「現実性」の圏域の中にその固有の関係を「仕方」(Modus)という基盤において表すことになっているのであり、これがヘーゲル『論理学』の中で展開されるのである。Modusを基盤にしているこの三者、つまり、Modalitätのカテゴリーは、どこまでも「現実性」の境域の中にその関係性が成立するものでなければならない。

こうして、一般に、「(es)の規定」の場面は「現実性」の論理学的場面でなければならないということになる。ところで、西田哲学は、この「(es)の規定」を「場所の自己限定」として考えるのである。ヘーゲルがこの規定の「遂行」をしているのに対して、西田は、その過程の全体を「(es)の」限定なのだというようにいわば丸ごとの構造を指摘したのである。要するに西田哲学はヘーゲルの弁証法を包んでいるところのものを理解するのである。この包んでいるものとは、一見すると(es)ではなく、esではないかと思われるかもしれない。しかし、西田は、esをesとして言うというところに立っているのではなく、(es)の底に超越するものを絶対無と思惟するのである。それは弁証法の底なき底としてこれを包むという意味では確かに絶対無と言われるべきなのである。しかし、これによって西田もまた、「現実性」の成立を思惟するように強いられることになるのである。西田哲学は、「現実的なもの」の成り立ちを明らかにする哲学となるのである。西田哲学は、本質的に形而上学の立場に立って、しかも形而上学の根底を明かしている最後の哲学であり、現実性というものを究極的に明らかにするのである(可能性の優位が知られずに終わる)。

このように、「(es)の規定」の全体は「現実性」の場面であり、その規定の遂行は、ヘーゲルの『論理学』の特に「現実性」の弁証法において行われ、これに対して、西田哲学においては、「(es)の規定」は「場所の限定」と見なされてその構造的な全体が解明されるのである。しかし、両者ともに言葉が貧里に迷っているが故のそこでの言葉の言う「仕方」の中で「思惟している」という限界をどうしても乗り越えることができない。すなわち、言葉は、まだ、思惟に使用される使用人であり、思惟を使用人とする主人になれない。言葉が言おうとしていることが現に出現するには「現実性」の「価値」というものが何らかの意味で低められ、更に、真理の価値が虚偽より低くされるような哲学的境位が確保されなければならないのである。この境位がニーチェの哲学のエレメントとなるのである。ニーチェ哲学は、本質的に(es)からesへ、形而上学の国境の関所破りを敢行する哲学である。したがって、ニーチェの哲学は、現実を明らかにするものではなく、可能性の世界を明かす哲学、すなわち、「未来の哲学」になるのである。

ところで、すでに述べたように、「(es)の規定」は、必然的に「(es)の規定」というような段階に到達しなければならない。ここでは、言葉の「苦境の声」が聞き分けられ、「必然性」が語られるようになるのであった。しかし、この「必然性」は、上で述べたことからすると、「現実性」の支配領域で認められるような「必然性」でなければならない。ところが、本来、「必然性」は何らかの意味で「言葉」の側がいわば主人公になっていることであるから、ここに「矛盾」が起きなければならない必然性があることになる。そしてまた、必然性が言われるところには必然的に「可能性」が伴われなければならないが、この「可能性」もまた「現実性」の支配圏域の中に姿を現すことになるのである。ここに現れる「可

能性」は、従って、最初はまだ「必然性」との繋がりがあがあるのではなく、むしろ、逆に「現実性」との繋がりが密になっている様相を呈することになる。それゆえ、我々は、以下に、「可能性」のこのような「動向」にことさら注目して、ヘーゲル「論理学」の「現実性」の弁証法の展開の中に語られずに隠されている「奥義」のようなものを明らかにしたい。

2. ヘーゲル「論理学」の「現実性」における「可能性」への着目

(1) 形式的可能性と実在的可能性

上で述べられたように、ヘーゲルの「論理学」でModalitätのカテゴリーが論じられるようになる時には、「現実性」が支配的な力を揮うことになる。「可能性」はこのような「現実性」の支配下では、単に「現実性」の否定として価値をもつことができるにすぎない。「可能性」のもつ本来の価値は、ヘーゲル「論理学」では完全に無視される運命にある。もっとも、原理的には、すべての形而上学は、同様に、「可能性」の方が「現実性」よりも価値が高いと評価することができないのではあるが、このような「無視」は、「必然性」の命名の原場を見失わせることにもなる。つまり、「必然性」は、なにか必然的ではない必然性として思弁の領域に姿を現すことになるのである。「現実性」の支配下では、「必然性」は、「なにか必然的ではない必然性」として思惟されることになる。このような「必然性」は、必然的に偶然性を自己の中に宿すことになるのである。このことは、「可能性」の価値が無視されていることによるのである。したがって、「必然性」に宿る必然的な「偶然性」は、本質的に「可能性」によってもたらされることになっている。「可能性」は、一方に、「現実性」の否定面になるとともに、「必然性」に宿る「偶然性」の必然性の必然的条件、ないしは、その根拠の役目を果たすのである。ヘーゲル「論理学」ではこのようなことわり

が知られずに、しかも、このことわりにしたがって三者の連関が論理的に展開されるのである。

ヘーゲルの『論理学』の「本質論 (die Lehre vom Wesen)」の構成からしてすでに、「現実性」の優位が示されている。すなわち、「本質論」は、周知のように、大きく三つのAbschnitt (部) に分かれていて、それぞれ、「本質自身における反省としての本質 (das Wesen als Reflexion in ihm selbst)」、「現象 (die Erscheinung)」、「現実性」と区分されている。そして、最後のAbschnittである「現実性」は、更に三つのKapitel (章) に区分され、第一章が「絶対者 (das Absolute)」、第二章が「現実性」、そして第三章が「絶対的關係 (das absolute Verhältnis)」となっている。一般にModalitätのカテゴリーが論じられているのが、この「第二章」である。内容からすれば、この「第二章」は「必然性」という題が付けられてもおかしくない。しかし、ヘーゲルは、この章のみならず、全体のAbschnittに「現実性」という題名を与えているのである。このような取り扱いは、ことがらに適合していることと考えられるのである。すでにその理由は、1. で詳しく解明されたので、ここでは、繰り返すことはしない。ただ、「必然性」が「(es) の規定」の中から、「苦境の声」として聞こえてくるということをもう一度思い起こすことが肝要である。すなわち、「必然性」は「現実性」の奥から聞こえてくるのであり、いってみれば、言葉の「苦境の声」を伝える巫女 (Auslegerin) は、「現実性」という家に入らずには、会えないのである。

現実というものをただなんとなく偶然の出来事の継起のようなものと受け取っているかぎり、我々はまだ現実性を捉えていないといえる。現実ということを現実として受け取る時には、そこに、必然的なことが見て取られるようにならなければならない。しかし、

同時に現実とはちょうどコンピューターのプログラムのように必然的な仕方では起こるのではない。もし、そうだとすれば、そこは現実の世界ではなく、単なる機械の世界でしかなくなってしまう。現実とは、予想もしないことが起きなければならない、コンピューター・プログラムから逸脱する偶然性がなければならない。つまり、「現実」とは、必然的に起こることではなく、それと異なることが起こりえるということ、「可能性」がなければならないのである。それゆえ、「現実性」は、一方にそこに必然性ということが潜んでいなければならないとともに、一方に必然的なことを否定するような可能性を含んでいなければならないのである。我々は、このような「現実性」の中に現実には生きている。しかし、現実には生きるということが「現実性」の論理学を基盤にしているということを認識したり、また、そこに含まれている極めて奥深い連関を認識するということは至難の事柄に属する。しかし、「現実には生きる」ことによって深く物を考える人にはおのずから、そこに「必然性」の声が聞こえてくるのでなければならない。そして、そのときには、「必然性」と対立的と見られていた「可能性」がその「必然性」と伴っていることが認識されるようになってこなければならないのである。我々は、みずからの生の必然（いわゆる運命）を認識すればかえって可能性に開かれ、自由になっていくということになる。「現実には生きる」ということはこのような論理から成っている。通常、このようないわば経験的に会得される現実の本質、つまり、現実の生の中に、運命といったような必然性との連関が知られることがあっても「可能性」は、ほとんど認識されることはない。しかし、論理学においては、「可能性」の去就が着目されなければならないのである。それというのも、上述したように、「可能性」は「不-可能性」との関係からのみ可能になっているからである。「必

然性」も可能でなければならないからである。しかるに、この「可能性」は、言葉が貧里に迷っているところでは、単に「現実性」の否定としてしか、消極的に役目を果たす外ないのである。しかし、「可能性」のこの消極的な姿こそが「現実性」の支配と優位を逆に証明するものになるのである。

事実、ヘーゲルの『論理学』では、「可能性」は、消極的な役割を演じ続けるのである。それは、三つの役目を果たし、ある意味でその役目を終えて消えてしまうとすら言えよう。その三つの役目は、ヘーゲル『論理学』では、「形式的可能性」、「実在的可能性」、そして、「絶対的可能性」と名付けられている。本来、「可能性」は、「必然性」の命名の原（言）場そのもの、「用意の秘術語」の内部を指す。両者は切り離されえない関係にあるのである。ところが、ここには「現実性」はその影すら見えない。「必然性」の命名の原（言）場から言葉が迷い出て行った先が「現実性」なのである。したがって、「可能性」は、「現実性」の支配圏域では、「現実性」を否定してそこに「必然性」をもたらしようとする陰の役目を果たすのである。しかるに、このように「可能性」の「お陰」でもたらされた「必然性」もまた、あの本来の「必然性」ではなく、「現実性」の支配圏域の中に出てきた「必然性」であり、「必然的とは（まだ）言えないこと」を、つまり、「偶然性」を含むのである。「偶然性」を含む「必然性」が「現実性」に現れるのは、「現実性」自身が自己へと帰り帰ることであるからである。貧里に迷っている言葉は、自分の故郷に帰ろうとするのであり、この動向は、あの原（言）場での「必然性」を映しているのである。ところが、「可能性」は、「現実性」の内部で、「必然性」と同じようにかの原（言）場での「可能性」の映しになっているのではない。なぜなら、「現実性」とは、言葉が貧里に迷っていることであるのだから、「言葉にとっての可能性」（つ

まり、言葉が最初に言われる可能性)がそこで失なわれてしまったからである。「現実性」の中での「可能性」の働きは、かの原(言)場での「可能性」を映すことではなく、「現実性」の中で「必然性」を想起させて(「必然性」を映し)、言葉が言葉に成るような可能性の入り口に言葉を近寄らせることである。やがてあの「可能性」に言葉が入ってくることを本来の「可能性」はただひたすら待っているのである。つまり、「可能性」は、「現実性」の内部では消極的な陰の役割しか果たせない。「可能性」は「現実性」を「必然性」に結び付けてその役目を終えるのである。その具体的な役目が十全に果たされる時、「可能性」は「実在的可能性」である。「形式的可能性」においては、まだ、「可能性」は「必然性」と「現実性」を結び付けるには及ばず、単に「現実性」の反省形態になっているにすぎない。ところが、「実在的可能性」となるに及び、「可能性」は、現実の事物を成立させる実在的な可能性、つまり、現実のものをそのように現実へと登らせる「諸条件」全体になるのである。

最初に「形式的可能性」が「現実性」の単なる否定としての役目しかしていないということをヘーゲル自身の言葉で確認しておきたい。

「この即自有(Ansichsein)は、止揚されたものとして、ないしは、本質的にただ現実性へ関係の中でのみあるものとして、現実性の否定者として規定されている、すなわち、否定的なものとして措定されている。」(S. 171)

ここで、「即自有」とは、他のところで言われているように、内的なものと外的なものとの区別における「内的なもの」に対応する。これに対して、「外的なもの」が「現実性」に対応し、これの最初の反省されたものが「即自有」としての「可能性」である。

このようにして措定された「形式的可能性」

は、なるほど、「現実性」の否定者という役目を果たしているけれども、その本来の役目である「必然性」への媒介者とはまだなっていない。そして、後者は、積極的な面になるのである。この積極面は、しかし、まだ「必然性」との肯定的関係をもたらずまでには成熟していないために、自己自身のこのいわば未熟さを自己媒介にして、否定的に現れるのである。つまり、「形式的可能性」は自己止揚して、「現実性」に転じるのであり、この両者の他者への転変を通じて両者の同一性である「必然性」へと通じるのである。しかるに、この「必然性」は「現実性」と「可能性」との単なる相互への転変という不安定としては、「偶然性」に他ならない。「形式的可能性」は、「現実性」を否定する一方で単に否定するだけではなく、「必然性」との繋がりをもたらずのでなければならないが、むしろ、「必然性」の外面的なもの、「偶然性」を最初にもたらずのである。つまり、「可能性」は「形式的可能性」として自己自身の他者になって媒介しているのである。「可能性」が自身の他者となっているということは、「可能性」は「不可能性」(以前に示された「不-可能性」ではない)でもありえるということ意味する。現実というものは可能でなければならぬという反省がされるとただちに、そこに、この現実とは、これではないことも有り得るものでなければならないということが言われるのである。現実とは、このような現実ではなかったことも有りえるというように出来ているのである。ところが、ここに登場する「可能性」は、本来的な「可能性」ではなく、つまり、「必然性」と伴うというあり方をとる「可能性」ではなく、むしろ、逆に「現実性」と伴うところの「可能性」である。これが、「形式的」と形容されるゆえんであり、このような「可能性」は、自分自身の他者になっているのである。このような「他者になっている」とは、一方に、「可能性」が自己矛

盾しているということであるとともに、他方で、「可能性」が「現実性」と同じであるということの意味する。つまり、現実というものは、可能でなければならないとともに、この現実、他でも有り得たということが言われるようになるのである。しかるに、この現実が他でも有り得たということは、それが「偶然」だったということの意味するわけである。しかし、このような「現実性」と「可能性」の両者が相互に関係することは必然でなければならないのである。ここに出てきた「必然性」は、ヘーゲルでは、「形式的必然性」と名付けられているのである。

「可能性」が「形式的可能性」となっている限り、それは「必然性」のいわば家にはなれず、したがって、「必然性」は、まだ、その外に居る。それは、「偶然性」ということであるが、これを「形式的可能性」は自分のところに招き入れるわけである。故に、この「形式的可能性」の「お陰で」、現実、は、「偶然的」なものになる。われわれは、現実というものをいつも偶然が重なることとして考えるようになるのである。ところが、このような「偶然性」こそ、「可能性」が招き入れたいところの、「必然性」でなければならないのである。つまり、「形式的可能性」そのものは、自己矛盾の故に、あるいは、単なる可能性の故に、「必然性」を「偶然性」として招くのでなければならないのである。

我々は、この現実を偶然の重なり合いであり、これとは別の可能性も有り得たということを知っている。しかし、同時にこの現実が単なる偶然ではないのではないか、という思いもまたあるのである。私がある小学校に入学したのは、度重なる偶然の結果であるが、そこに行かねばならなかった必然もまたあるように思えるのだ。こうした思いがおこるのも、現実がその反省形態として「可能性」を含んでいるが故である。現実が反省されて「可能性」もあったということが論理的に成立し

ていなければ、我々は、「偶然性」とひそかな「必然性」を感知できないのである。私がある小学校に入ったという現実がもしかして偶然ではないのではないかということが思われるのも、現実が反省されてそこに「可能性」が「必然性」を招き入れえるようになっているからなのである。そして、この現実、は単なる偶然ではなく、もしかして、必然があるのではないか、と思えるのも、この「現実、はもしかして」という形となるのであり、「可能性」はもうすでに「現実性」に転変しているのである。すなわち、「必然性」は、「現実性」と「可能性」の両者がお互いへと転変するところ、に、ようやく反省されて感知されるようになっているのである。

こうして、「形式的可能性」の「お陰」で措定された「必然性」は、まだ「形式的必然性」にすぎない。すでに述べたように「(es)の規定」の内容は、まだ、単に外的なものになっているにすぎない。したがって、この「形式的必然性」は「必然性」そのものへと深まって行かなければならない。そして、その過程を可能にしているのは、ふたたび「可能性」なのである。「必然性」が「形式的必然性」を脱して、本来的な「必然性」へと深まるには、「可能性」自身が「現実性」の単なる否定者にとどまらず、独自の媒介の役目を自覚しなければならない。このようになった「可能性」は、ヘーゲルの『論理学』では、「実在的可能性」と呼ばれるのである。この「可能性」を媒介にして、「必然性」は「実在的必然性」へと深まる。しかし、この「必然性」もまだ、本来の「必然性」、つまり、「絶対的必然性」に至ったのではない。

「実在的可能性」は、「現実性」を「必然性」に繋げる媒介をするというより、むしろ、「必然性」を「必然性」へと媒介する。というのも、「可能性」は、本来、「必然性」と同じ場面で会しているからである。「必然性」を「必然性」と媒介するとは、「可能性」が「可能性」

としてはある意味で消えることによって、「必然性」が「必然性」として現れるようになるということを意味するのである。しかし、このような媒介の役目をするためには、まずは、「実在的可能性」として、「可能性」は「現実性」との関係を保ちながら、「必然性」を「形式的必然性」から「実在的必然性」へと深めるための媒介を果たすのである。

具体的には、「実在的可能性」とは、ある現実が起こるための諸条件の全体のことである。私がある小学校に入学するには、たしかに、多くの偶然が重なったのではあるが、同時に、そうなるための条件があったのである。すべての条件が整ってようやく私は某小学校に入学できたのである。どのひとつの条件も欠けていたなら、私はあの小学校で学ぶことはできなかったに違いない。ところが、その小学校に入学するには、たとえば、父の転勤という偶然な出来事があったのである。しかし、この偶然も私がある小学校に入学するための条件と考えられる。つまり、その父の転勤もまた、さらに条件があって現実になったと考えられるからである。このような無限といってもよい諸条件の全体は、ある現実にとっての「可能性」であるが、単に「形式的可能性」、つまり、この現実が可能であったはずだという意味の「可能性」とは異なっている。この「可能性」は、むしろ、ある現実にとってはその現実とは他のもの（これが諸条件である）が可能になっていなければならないという意味での「可能性」である。つまり、この「可能性」は、この特定の現実の可能性ではなく、その他者の「可能性」なのである。ある現実が可能になるには、その他者の「可能性」がなければならないのであり、このような「可能性」が「実在的可能性」である。しかし、すべての条件が満たされてはじめてこの現実が起きたということは、「実在的可能性」はそれ以外には不可能であったということを意味する。つまり、諸条件の全

体が一種の「必然性」を示すことになる。私がある小学校に入学するに際し、父の転勤という偶然があったにしても、これは、更に他の条件によって起きたとするなら、ここに偶然と見られたことには必然があることになる。この転勤には、たとえば、他の人がたまたま、事故にあって会社を退職しなければならなくなり、その代わりに転勤することになったというような偶然があったとしても、この事故そのものがまた、諸条件の全体によって必然的に起きたのでなければならないであろう。こうして、「実在的可能性」は、「現実性」と深く関係しながら、「必然性」を呼び出すことになるのである。しかし、ここに呼び出されてくる「必然性」は、「形式的必然性」ではなく、その外面性から脱出したものである。つまり、「実在的可能性」は、「必然性」から「必然性」へと媒介するのである。

(2) 絶対的可能性

上で示されたように、「必然性」は、最初に「形式的必然性」として措定され、次にその外面性を脱出して更に深い意味の「必然性」になるために、「実在的可能性」を媒介者とする。そして、こうして措定される「必然性」は、「実在的必然性」と呼ばれるのである。この「実在的必然性」は、「必然性」としては、まだ偶然的な面をもっている。なぜなら、この「必然性」は、自己自身から開始されたのではなく、それゆえ、ある前提をもっているからである。つまり、この「必然性」は「相対的必然性」という本性をもっている。「必然性」が「相対的必然性」となっているのは、「可能性」がまだ、「現実性」との関係のなかに繋がれているからである。故に、「相対的必然性」が更に深まり、「絶対的必然性」に至るには、可能性が「必然性」との繋がりを強化し、それとともに、「現実性」との関係性が無くならなければならない。そして、このようにして「絶対的必然性」を媒介する

「可能性」が「絶対的可能性」と呼ばれるのである。こうなると、これまで、「現実性」の「即自有」とされていた「可能性」は、「必然性」との関係の中に立ち、「即自有」としての役目から解放される。これによって、「現実性」の「即自有」は、「必然性」となり、このような「現実性」は、「絶対的現実性」と呼ばれるのである。つまり、ここに、現実には、それ以外にも可能であったとなるのではなく、これしか有りえなかったとなるのである。ここに、「可能性」はある意味では消えたといえる。しかし、「可能性」は単に消滅したのではない。「形式的必然性」が「実在的可能性」を媒介にして「実在的必然性」に深まったように、「可能性」は、更に、「実在的必然性」を「絶対的必然性」へと媒介するのである。しかし、この「媒介」は、「実在的可能性」の為したものはおのずから異なることになる。つまり、この媒介は、「必然性」の外のものから「必然性」へと媒介するのではなく、「必然性」自身の中での自己媒介という意味をもつようになる媒介でなければならないのである。こうした媒介を通じて、「絶対的現実性」ということが媒介されるのである。

「現実性」が「絶対的現実性」となることは、すでに述べたように、それ以外には有り得なかったということになることであるから、一見すると、「可能性」がなくなっているように見える。しかし、そうではなく、「可能性」はむしろ、本来の地位に就くということによって、そうなるのである。そして、「可能性」は「必然性」の自己媒介を媒介する役目を果たすのである。「絶対的可能性」は、それゆえ、必然的なものなのである。故に、「絶対的現実性」も、「絶対的可能性」も両者とも必然的であり、自己自身を根拠にしていることになる。「可能性」がこのように「必然性」にとっての固有の役目を果たすことで、「現実性」は、「可能性」から独立して、絶対的

なものとなる。しかし、この「可能性」は「必然性」そのものではなく、むしろ、逆に、「可能性」故に「必然性」もまた有り得るとなるべきであるから、この「可能性」、つまり、「絶対的可能性」は、「必然性」が自己の外面になっていることを示すことであるのである。云いかえれば、「絶対的可能性」は、「必然性」の外面になっていることを表すことであり、「偶然性」なのである。「可能性」はこのようなやり方で、「必然性」が「盲目 (blind)」であることを浮き立たせるのである。本来、「必然性」は「可能性」の原 (言) 場で命名されているのであった。すなわち、「必然性」は「用意の秘術語」において命名されている。ところが、言葉が貧里に迷い込んだ場面では、「必然性」は原 (言) 場の「必然性」を映し、言葉の苦境の声になっているのであった。「可能性」は、そこでは、このような姿の「必然性」を聞こえるようにする「陰の」媒介者に徹するのである。そして、「可能性」が「陰の媒介者」になっている限り、「現実性」の支配が続いているのである。すなわち、そこでは「必然性」は、なにか必然的ではないものを、偶然性を含んでいる。この現実がそれ以外には有り得ないとなるに及び、それは同時に全くの偶然であった、それ以外にも有り得たとなるのである。サイコロを投げて出る目の数はあらゆる条件が整って起きるのであるから現実には一つしか有り得ない。しかし、それは他でも有り得たのである。私がある小学校に入学することは他には有り得ない必然性であったのであるが、同時にそこには偶然性がなければならなかったのである。そして、これが「現実」ということなのである。そこには、「お陰」となって働く、「可能性」が、ある未来が、潜んでいるのである。我々は自らの過去の中に「必然性」、すなわち、運命を見出す限り、そこにまた、未来への示唆を知るのでなければならぬであろう。現実をただ受け取っている限り、「現実性」という

ものを認識することはできないのである。

さて、ヘーゲルの『論理学』の中での「可能性」の取り扱いがここでは注目されることになる。「可能性」は、なんらかの形で、「現実性」とのいわば縁を切って、「必然性」との縁を結ばなければならないが、しかし、それを陽にではなく、「陰」でなさなければならないわけである。この微妙な連関がヘーゲル「論理学」の思弁のなかにどのような形で認められるようになるのだろうか。

最初に注目されるのが、「二つの現実性」である。この言葉は、次のようにして、登場する。

「このゆえに、絶対的必然性は、盲目である。一方で、現実性としてまた可能性として規定されている区別された両者は、有としての自己への反省の形態をもっている。それらは、このゆえに、両者とも自由な二つの現実性であり、それらのどちらも他方の中に映らないし、どちらも他方への関係の跡を自らにおいて示そうとはしない。」(S. 183)

ここで見られるように、ヘーゲルは、「必然性」の二つの区別される契機である「現実性」と「可能性」が、「絶対的必然性」において二つの「現実性」として規定されることを明らかにしているのである。そして、この「二つの現実性」という規定が登場するとそれ以降、「絶対的可能性」という語は語られなくなるのである。これまで、「可能性」は、「現実性」の反省態ないしは即自有として「現実性」にとっての否定者としての地位を与えられていたが、ここきて、「現実性」の地位を与えられれば昇格したのであろうか。そうではなく、むしろ、「可能性」は、「現実性」との縁を切ったのである。そして、「可能性」は「必然性」との固有の関わりあいに入るのである。すなわち、「必然性」を「偶然性」として登場させることが出来るようにと自らの陰としての役割を果たすために、「可能性」は、「現実性」の即自有が「現実性」

に他ならないことを示して自己を否定するのである。「可能性」は、「現実性」を「必然性」なものとするとともに、「必然性」を偶然的にするような陰の働きをしながら、「必然性」との固有な関係性を示すようになるのである。いわば「必然性」は「可能性」に手をひかれて連れ出されてきたのであり、「盲目」なのである。「必然性」のこのような盲目性は「可能性」がまだその本来の輝きを見せずに陰で働いているということから起きているのである。「可能性」には可能性の力があるのである。

こうして、「可能性」は、「可能性」としては、「必然性」を偶然性として登場させる陰の働きをなすことによって、みずから「絶対的可能性」となる。そして、この偶然性が「絶対的現実性」であるのだから、「絶対的可能性」は、「絶対的現実性」を単なる「可能性」、他でもありえるにすることになる。しかるに、ここに出てきた「可能性」は、ヘーゲルの言うように「空虚な」規定である。このような全連関は極めて複雑な様相を呈しているが、「可能性」の本来の去就に注意することによってある一貫した論理を見て取ることができるのである。

3. 「(es) の規定」の形式規定としての様相のカテゴリー

我々は、1. で「(es) の規定」が「現実性」のカテゴリーの支配圏を構成していることを明らかにし、2. では、この支配圏の中で「可能性」のカテゴリーがある重要な意義を持つという洞察をヘーゲル『論理学』の中で検証する試みを為したのである。「可能性」は、我々の洞察から、「現実性」に対する否定的役目をするのが根拠付けられた。そして、実際、ヘーゲルもまた、「可能性」を「現実性」の即自有として、否定的なものとして考えている。そして、「可能性」が「現実性」を「必然性」と媒介する役目を果たすことも証示さ

れた。ところで、ヘーゲルの『論理学』においては、「可能性」は、まだ、「現実性」との関係を保っているような記述になっていることは否定できない。では、我々のあの洞察は、見当違いであったのであろうか。たしかに、上述したように、「二つの現実性」という言い方の中に、「可能性」がある意味では「現実性」と同じになり、その意味では、「可能性」がいわば消えて「現実性」から縁切れしたことが明示されているように見える。その意味では、我々の洞察とよく一致していると思われよう。しかし、ヘーゲルによれば、「可能性」が「空虚な規定」になることが「絶対的可能性」となっていることなのである。「可能性」が、「絶対的可能性」となり、「空虚な規定」を獲得したというのは、「現実性」の内部で「可能性」がその本来の姿を見せたということを意味する。「可能性」は、「現実性」と離れ、「可能性」としては絶対的なものとなるのだが、それは空虚な規定を得るのである。このような「空虚な規定」という言い方のなかに、「可能性」がまだ「現実性」の支配圏に属していることが示唆されている。

さて、ここで我々は、「(es) の規定」ということを更に深く、そして、詳細に考えてみたいと思う。そして、「可能性」が「可能性の力」へと移行することを示唆したい。

「(es) の規定」における (es) の es とは、すでに序論で示したように、言葉が言葉として言う場合の言う言葉の人称、つまり、「何が初めの言葉として言うのか」の答えになるものである。このようになる「前」が es gibt であり、ここで自己忘却が起こって、es は、(es gibt) としてみずからを規定することになるのである。これが、「(es) の規定」に他ならない。したがって、規定は、何か存在者の規定ではなく、規定するもの (das Bestimmende) が規定するのである。最初は、規定するものの規定することではなく、外的反省による規定であり、ヘーゲルによれば、

それは、「絶対者の解釈」である。なぜなら、規定するものが規定するのではない以上、そこで規定されることは、規定するものではないものが規定することになるからであり、これは、解釈となるからである。しかし、「(es) の規定」は、この段階を超えることで、規定するものが規定するに至らざるをえない。次の段階は、しかし、まだ、「解釈」となっているが、規定するものが規定するというものの形式が明らかになる段階なのである。つまり、「(es) の規定」は、形式的規定を取る必然性があるのである。形式的規定とは、最初に、規定されたものが直接的に与えられていて、それが否定されて規定するものが措定されるが、これもまた、規定するものそのものではなく、その意味では、規定されたものとなっているという形式である。そして、最初に規定されていたものが「現実性」、その否定者として、その即自有として措定されるものが「可能性」そして、両者の統一性として、規定するものそのものとして措定されるものが「必然性」になるのである。この「必然性」はしかし、ただちに、もとの「現実性」と同じであり、偶然性に他ならない。したがって、「必然性」とは、規定することの中で自己に戻っていくこの運動を意味するわけである。そして、この運動は、必然的に形式的規定を取るものであり、この形式的規定が三つの様相のカテゴリーとなるのである。

「必然性」は、この意味では絶対者の解釈者としては、外的ではなく、絶対者自身の解釈者である。ヘーゲルは、このことを次のように語っている。

「しかし、絶対者の巫女 (Auslegerin) は、自己と同一であり、自己自身を規定するものとしての絶対的必然性である。」(S. 185)

ところで、「(es) の規定」は、必然的に形式的規定を取るものであるから、「絶対的必然性」が登場することによって、更に形式的規定を乗り越えて、規定するものが規定するよ

うにならなければならない。それが、ヘーゲルの『論理学』では、「絶対的關係 (das absolute Verhältnis)」と言われていることである。故に、「絶対的關係」は、「必然性」が消えてしまうことではなく、それが更に自己を規定するようになるということである。「(es) の規定」とは、「必然性」の奥に入っていくことなのである。「必然性」の奥では、規定することそのもの (das Bestimmen als solches) が思惟されることになるが、これは「言葉のようなもの (ロゴスのなもの)」が現れるということであり、ヘーゲルでは、それはBegriff、つまり、概念と呼ばれるのである。規定されたものが本来は、規定するものであるということが気付かれる段階は、Begriffのいわば前段階であり、これは、ヘーゲルでは、「因果関係 (Kausalitätsverhältnis)」に相当するのである。それゆえ、ヘーゲル「論理学」の「因果関係」は極めて深く考えられた思想であり、他の追従を許さない独創的な思想でなければならない。

以上のように、「(es) の規定」には、必然的に形式的規定が含まれることになり、これが様相のカテゴリーである。「可能性」は、この形式的規定の形式性に深く関与しているのである。なるほど、「可能性」自身が形式的規定そのものを構成する一要素にすぎないが、これまで論じたように、むしろ、「(es) の規定」そのものがあの原 (言) 場における「可能性」の中で可能になったのであり、その形式規定の「可能性」もまたこの可能化に拠るのである。この可能化は、ヘーゲル『論理学』においても、実体 (Substanz) の力 (Macht) として、「絶対的關係」の箇所では呼び出されてくるのである。この力は、本来、規定するもののことであるが、まだ、形式的本性を脱しない段階では、そのように措定されるのである。それは、「現実的」なものを「可能性」へ、そして、可能的なものを現実化する実体の力である。もっというなら、必然性

の奥へと引き入れる力そのものが「可能性」の「お陰」、すなわち、「可能性の力」に拠るのである。それは、まさに、「奥義」に引き入れるMachtなのである。周知のように、Machtは、mögenに由来し、これは、möglichkeit (可能性) の語源になっている。ヘーゲルが実体と遇有との関係の弁証法において、このMachtを使ったのには、それなりの理由がある。つまり、実体と遇有との関係もまだ、形式的規定性の残渣があり、このために、規定するものが規定するということには至っていないのである。規定するものは規定されたものと癒着していて、規定する方が規定できない事態になっているのである。このようなあり方では、規定する方は、支配的な力をもっているが、まだ、それは形式的なMachtになっているにすぎない。そして、これが、実体と遇有の関係に登場するMachtなのである。この形式的MachtがMachtとしての本来の働きをするようになると、規定するものの方が規定するようになり、これが、上記の因果関係になるのである。ヘーゲルは、このようになった実体を適切にも、möchtige Substanz (S. 188) と名づけている。このようになることは、すでに述べたように、「必然性」の奥に入っていくことであるが、同時に隠れた「可能性」の陰の力が作用していることでもある。規定するものが規定するようになっていく、すなわち、「(es) の規定」には「可能性の力」が働いているのである。実体にMachtという言葉が出てくるのは、ヘーゲルが思惟していた以上の意義があるのである。ヘーゲル「論理学」における「現実性」の弁証法に潜在している「可能性」の働きは、今やMachtという言葉の中に姿を見せるのである。

以上のように、「可能性」は、「現実性」と縁を切って、「絶対的可能性」となるに及び、空虚なものになるが、それは、「可能性」が「可能性の力」としてその本来の姿を顕在化する

ための一過程であり、いわば成虫になるための脱皮のようなものであることが理解されるであろう。そして、このことは、ヘーゲル『論理学』の「現実性」の思弁が間接伝達論的論理学からその可能性の根拠を明かされたということの意味するのである。

4. 補足的説明

ここで、「(es) の規定」と因果関係との関連について補足的な説明を加えておきたい。というのも、ヘーゲルの『論理学』では本質論の最後に因果関係から概念論への移行が示されていて、この過程が、「(es) の規定」の立場から説明されなければならないと思う人も居るに違いないからである。しかし、ここでは、余り詳しくこの連関を述べることはできないので、要点を簡略に説明するに留めたい。因果関係と「(es) の規定」との関係を更に詳しく知りたい場合は、ここで述べられていることを道標としながら、ヘーゲルの『論理学』の該当箇所を格別の注意を払いながら精読することを勧めたい。

因果関係は、「(es) の規定」において規定されてくる (es) そのものへの道中に他ならない。「(es) の規定（厳密には、上述のように (es) の規定である）」から「(es) そのもの」の規定へと規定は深まるのである。この道中が因果関係というものが成立する可能性の場面なのである。

「(es) の規定」において、最初は、規定されたもの、つまり、影像の方が主となっていったところから、規定する方が主となることによって、「現実性」は、「絶対的關係」へと移る。しかし、規定する方は、es そのものになることはできず、相変わらず、その影像であり、規定されたものである。このようにして、「(es) の規定」は、やがて、規定するものと規定されるものとの同一性へと深まることになるのである。これが「絶対的關係」と言われることが起きてくる可能性の根拠であ

る。しかし、「絶対的關係」の最初の段階では、規定する方は、まだ、規定するものと規定されるものとの同一性として措定されるまでには到らず、そこへの生成 (Werden) になっているのである。そして、このような段階が「実体性 の 関係 (das Verhältniss der Substantialität)」である。そして、この段階が超えられるとそこに規定するものが規定されたものであるという同一性の関係が現れるようになる。この段階が因果関係に他ならない。「(es) の規定」は、「(es) そのもの」の規定になって「(es) の規定」を成し遂げたことになるのである。その意味で、因果関係は、必然性の奥まったところに座している必然性のいわば祖師と言えよう。しかし、因果関係は、(es) そのものではなく、そこに、区別をまだ残しているために、最終的にそれは、「交互作用 (Wechselwirkung)」となるのである。それは、そのまま (es) そのものへと移行し、「言葉のようなもの」が言われるようになる。しかし、それはまだ単に「主語 (Subjekt)」となっている「言葉のようなもの」なのである。かくして、「交互作用」から「概念」への移行の可能性が根拠付けられる。貧里に迷っていた言葉は、ここに来て、言葉として迷っていたのだという自覚に達するのである。「火の粉が火を求めている」というような自覚に到ることができたのである。ここに、「必然性」から自由への移行が果たされることになる。影の中に迷い込んでいた影がその影の中から自分を影として自覚することで「影の中で」という暗闇から脱出してきたのである。しかし、それはまた影像になっているのである。しかし、違っているのは、影の中に入り込まなくなったということである。自由になったのは、迷っている言葉である。西田哲学では、この影は絶対無の影として把握されていて、その限り、西田はヘーゲルの立場を正しく捉えていると言える。しかし、絶対無そのものが言葉から理解

されているのではない。その意味で、絶対無の立場は、言葉が貧里に迷っている場面に属している。影の底には「(言葉が言葉として)言おう」とする概念を否定するような、したがって、真理を否定するような虚言(虚構)への意志が発見されなければならない。これが、ニーチェの「力への意志」である。

エピローグ

「間接伝達論的論理学」のいわゆる「金曜日」は、(es gibt)の領域であり、そこでは、言葉は、「貧里に迷っている」のであった。言葉は、そこで、自己の故郷への古道をまだ見つけられない。この古道が、es gibt, であり、そこでは、言葉への道に言葉が言う。人間は、言葉が言うことに役に立つものとなる。あの「金曜日」には主人公になっていた思惟(思弁的思惟)は、ここでは、控えめに言葉の言うことに属して、言葉の言うことが我々の耳に聞かれるようにわずかな寄与ができるのではと心がけて、自身に相応しい振る舞いに落ち着いている。思惟は、言葉が言う

ことに控えめに役立つようにと気を使うのである。このような気遣いの出てきた思惟がハイデガーの思惟なのである。それは、これまで、私たちが忘れていた「控えめな思惟」であり、これみよがしに、威勢をはる思考の優位とは懸け離れたものである。人間の思惟が、このように、控えめに気遣いを示すようになって、我々は、近代という歴史の次の歴史的エレメントへの希望を見出すことが出来るようになるのである。思惟と知の優位に立つ哲学や広い意味の科学的世界観はやがて過去のものとなり、このような「控えめな思惟」の歴史が静かに必然的に到来する。

注

ヘーゲルの『論理学』からの引用は、以下の版によった。引用文の末尾の括弧内にこの版のページ数を記した。

G. W. F. Hegel: Wissenschaft der Logik II, Philosophische Bibliothek Bd. 57, Felix Meiner, Hamburg, 1975.